

# 生徒とのふれあい12 音叉

谷内 純一



大学卒業後、私の最初の赴任校は高知農業高校でした。ある日、体育館で全校生徒の集会がありました。教頭の杉村正先生が演台を前にして立ちました。杉村先生は「雑談をやめません。当時生徒数は九百人ほど、ほとんどが男子生徒で、蜂の巣をつついたような大変な騒音でした。杉村先生はやおら演台の上の水の入ったコップを右手に持って高々と上げました。生徒たちは何だろうとコップ



を見つめ少しだけ騒音が低くなりました。杉村先生は言いました。「諸君、ここに一杯の水がある。この水は一点の汚れもない清らかな水である。でも、もしこの水にわずかな濁りでもあつたら、そして、それが集まり集まって大河となったら、ものすごい濁流となるんだよ。諸君一人一人のわずかなさきさきも集まれば今日のような騒音になるんだよ。」

「杉村先生はそれを見つめ少しだけ騒音が低くなりました。杉村先生は言いました。それは風に思うようになりました。それは「杉村先生はそれを見つめ少しだけ騒音が低くなりました。杉村先生は言いました。それは

## 憲法への思い⑥ 九条外交こそやるべし

森 哲実



憲法について考える時、芦田均内閣によつて昭和22年5月3日に発刊された「新しい日本のため」に「発刊のことば」を読み直してみたい。「古い日本は影をひそめて、新しい日本が誕生した。生まれかわつた日本には新しい國の歩み方

と明るい幸福な生活の標準とがなくてはならない。これを定めたものが新憲法である。日本国民がお互いに人格を尊重すること。民主主義を正しく実行すること。平和を愛する精神をもつて世界の諸國と交りをおこなうこと。新憲法にもられた

これらのことは、すべて新日本の生きる道であり、また人間として生きがいのある生活をいとなむための根本精神でもある。まことに新憲法は、日本人の進むべき大道を示したものであつて、われわれの日常生活の指針であり、日本国民の理想と

抱負とをおりこんだ立派な法典である。…(抜粋)待ち望んでいた憲法が發布された喜びと期待に満ちた名文である。ここにあるのは、個人の尊重と世界が戦争をしない恒久平和という二つの基本原則。日本国憲法の精神はここに尽きると言えます。国民一人一人が人間として尊重され平和的に生きられる権利。戦争は永久に放棄すること。驚くことに自民党の憲法案は、見事にこの正反対を書いています。彼らが人類の理想を都合の悪いものとして認識していることがよくわかります。

平和を草の根の様に広めるため、私は平和美術展を40年近くやってきました。芸術や文化は平和であればこそ生まれ破壊するものが戦争。1999年オランダでハーグ世界市民平和会議が開かれ、21世紀の平和と正義のためのハーグ・アジエンダを採択しました。「各国議会は、日本国憲法第9条のような、政府が戦争をすることを禁止する決議を採択すべきである」と述べている。新たな世紀を迎えるにあたり、戦争の絶えなかつた20世紀から平和の世紀へと世界が生まれ変わるように9条の理想を実現せよと強く訴えています。

又を鳴っている音叉に近づけると、敲きもしないのにもう一つもやがてブーンとうなりだします。次に、はじめの音叉に手をふれて音を止めます。でも後からうなりだした音叉はうなり続けます。皆さん、ご存知の共鳴という現象です。なぜ、鳴るのか。それは二つの音叉が同じ材質でできており、同じ形をしているからです。

杉村先生の言葉に共鳴して生徒たちは話をやめたのです。杉村先生の言葉に共鳴できる素晴らしいものを生徒たちが持っていたからだと私は思います。共鳴・共感とは人を深く結びつけてくれます。共感の喜びは人間の喜びの中でも大きな位置を占めています。共感の喜びは、他の生物にもあるものなのでしょうか？

憲法9条は、世界を平和に導く最高の条文である。多くの犠牲と苦難により導かれたこの憲法、世界の宝であり、わが国が外交のキーワードとして世界に広めるべき役目がある。岸田総理!!お金をもって世界を回るより9条を掲げて世界に訴えて回れ!!と言いたい。

「新しい憲法 明るい生活」は亡くなつた町田祐一先生が復刻して平和資料館草の家にとくさんあります。読みた方はどうぞ。